

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。なお、本文には、一部省略した箇所がある。

民俗宗教において、^た崇りの信仰は大きな比重を占めている。それは人びとが他人の、神の、動物の怨念を、妬みや恨みを恐れていることを意味している。さらにいえば、それは広い意味での「世間の目」「霊の目」に対する恐怖・配慮の象徴的表現ともいえるかもしれない。殺されたり、人生半ばでこの世を去った人びとに対して、格別の思いを抱いてきたのが日本人であった。人びとは殺した者の呪い・祟りを恐れた。この怨霊を封じ込めるために祀りもおこなった。しかし、それだけでなく、家族や親族、共同体のために犠牲になった者に対しても「負い目」「後ろめたさ」を感じ、その者の心境を思いやり、その霊を慰め、そのために祠^{ほこら}を建て、神に祀り上げることさえした。「慰霊」という行為は、怨霊を鎮めるといっただけでなく、もつと広い意味での鎮め、霊に対する生者の心の内部に発生する「後ろめたさ」「負い目」を浄化する行為であった。言いかえれば、生きている日本人は、生きていくというだけで、霊に対して弱い立場に置かれていたのである。生きていく人は「霊の目」を、「先祖の霊の目」「殺した者の霊の目」「墮^おろした子供の霊の目」「身代わりになって死んだ者の霊の目」「怨霊の目」等々を、つねに無意識のうちに気にしているのである。その「霊の目」が、怒りに満ちたものではなく、あるいはこの世にミ^aレンを残し続けることなく、安らかなものになるように、と祀りをおこない、供養その他の「慰霊」行為をおこない続ける。それが「祝い祀り」の本質であった。

私の体験談を書いておこう。二五年ほど前からミクロネシア連邦チューク(旧トラック)州で人類学の調査を断続的におこなっている。ここは、第一次大戦後から第二次大戦終了まで、国際連盟委託統治領「南洋群島」として日本が支配していたところである。チューク環礁の礁湖は大きな軍艦も^bテイハクできたので、戦時中は、ニューギニア方面に進攻する日本の連合艦隊の重要な基地になっていた。しかし、反攻に転じた米軍の激しい空襲と艦砲射撃によって、チューク諸島にいた軍人、軍属、民間人、そして現地

人の多くの命が失われたところでもある。このため、戦後五十年以上経った今でも、空襲によって沈んだ軍艦や輸送船などに残っている遺骨を拾い集める厚生省の遺骨収集団や戦没者の霊を慰める各種の慰霊団が、このチューク諸島を訪問してくる。私もこれまで何度かそうした団体と出会った。またチューク在任の親しい日本人や現地人から、慰霊団がときどきやってきていたことを聞かされた。

慰霊団の現地での慰霊行動は、私には十分に理解できるものである。たとえば、慰霊碑の前に花輪が飾られ、同伴してきた僧が戦没者の霊を慰め鎮めるためのお経を読み、参列した人びとが線香をあげる。あるいは、船で海上に出て、花輪や写経を捧げる。

しかしながら、次のような儀礼的光景は、それを目にしたアメリカ人や現地人には異様なもの、不思議なものを目撃してしまつたという印象を与えるらしい。それは遺骨収集にまつわるものである。海底の沈船から引き上げられた遺骨を関係者が最敬礼で迎え、日章旗や海軍旗で覆つて浜辺で荼毘だひに付し、お経を読んで供養し、翌日、その骨を拾い上げて骨壺に納める。その光景は、日本人の私には胸にジーンとくるものがある。そこに集められた遺骨は私とは縁もゆかりもない者であつて、しかも、私の生まれる前に死んだ、身元さえはつきりしない人の骨にすぎない。にもかかわらず、このような場に偶然居合わせると、この遺骨になつた人の非業の死を勝手に思い描き、思わず合掌してしまう。このような慰霊の仕方、遺骨の収集は、日本人ならば少しも奇妙な振る舞いではないのである。

ところが、こうした光景がアメリカ人や現地人には異様に映るらしいのだ。たまたまこれを目撃したあるアメリカ人医師は、海底に眠っていた日本兵たちが地上に突然現れたような気分になつて背筋が寒くなつたという。なるほど、艦船から拾い上げた骨の前で、船とともに沈んだ軍服姿の若者の写真を前に祈つている未亡人や生き残つた戦友は、もうとつくに七十代を過ぎた老人である。そんな彼らがよれよれになつた海軍帽をかぶつて、誰ともわからないような遺骨を焼いたりそれに対して合掌したりしているのだ。日本文化のコンテキストに位置づけて解釈できない異文化の人が、その姿を見て奇妙な感じを抱くのは当然のことである。そして、この光景に対する「私たち日本人」と「彼ら」との受け取り方の違いに、日本文化の特徴、とりわけ日本人の「霊」への信仰の特徴が示されていると思われる。

すなわち、この年老いた元日本海軍の兵士たちは、ここで戦死した戦友の霊を「慰めている」のである。海に沈んでいた戦友の霊が誰かに怨霊となつて祟りをなしているわけではない。「英霊」として「靖国神社」に祀つてくれと夢やタクセンで要求したわけでもない。そうではなく、物言わぬ「戦友の霊の目」を背に負つて生きてきた戦友の「思い」が、死んだ者が可哀想だ、生き残つて申し訳ないという「思い」が、慰霊行為を導き出しているのである。ある意味で、戦争によつてこの年老いた元日本海軍の兵士たちの人生の時間の、ある部分が止まつてしまつたのだらう。そして、その後の人生はこの「霊の目」を安らかにすることを意識し続ける人生であつたのだらう。私たちはここに脈々と流れる日本人の民俗的な信仰伝統を見いだす。

ところで、遺骨収集の様子を見たとき、異郷の地で命を落とした者の遺骨（＝よ霊魂の依り代）を拾つて故郷に帰すという習俗は、昔からの習俗であつたかのような印象を与えるかもしれない。しかし、私たちは、近代以前に、異郷の地で戦死したり病死や事故死した人の遺骨を故郷に残された肉親が探し出し、拾い集めて、故郷に連れ戻してくる、といった習俗を民衆の間に見いだすことはできない。山折哲雄によれば、日本人は、古来、遺骨に対する関心は低く、遺骨を高野山に納めるといった習俗はあつたが、そのような異郷の地で命を落とした者の遺骨を収集するという儀礼的行為が、広く民衆の間に定着したのは日中戦争開始以降のことであるという。当時の国家が、戦場の各地で散つた戦死者たちの遺骨を戦地におもむいて集め、故郷に持ち帰つてその霊を慰め、「英霊」（＝遺骨）として靖国神社やその下部組織である地方の忠魂社＝護国神社で祀り上げることを始めたのである。これは民俗的信仰を変形させて作り出した、近代の軍国主義国家の創造物であつた。

ところが、このような国家的行事を生み出し運営していた国家が敗戦によつて倒れた。したがつて、それによつて、その国家がその国家のために命を捧げた兵士を祀るという疑似宗教的行事も廃止されるのが当然であつた。とくに、兵士の遺骨を収集するなどという習俗は、昭和になるまで存在していなかつたのだから、その事業主体を失つて簡単に消滅しても不思議ではなかつた。しかし、この遺骨収集の儀礼的行為は、わずか二十年足らずの間に日本人の心性の奥に入り込み、国家主義的儀礼の域を越えて国民的・民衆的な文化に変質しつつあつたのである。いや、民衆の宗教心が戦前の国家が作り出した儀礼行為を自分たちの信仰に組み込んでしまつたといつた方がわかりやすいかもしれない。

戦後、独立を再び回復したとき、新生国家は遺骨の収集を開始する。これには、「靖国神社法案」に示されるように、それを政治的に利用しようという政治家や一部の戦没者遺族たちの思惑があったことは否定できない。しかし、その骨を依り代にして帰国する霊を迎えたいという「思い」は、国家だけではなく、民衆のなかにもあったとみるべきであろう。その心性は、近代国家という枠組みの成立以前から存在していた、「霊の目を意識した「後ろめたさ」に由来するものであったのだ。実際、戦没者の慰霊行為とはほぼ同質の慰霊行為を、たとえば、私たちは日航ジャンボ機のツイラク現場である御巢鷹山、あるいは阪神・淡路大地震のヒサイ地にも見いだすことができるだろう。

〔注〕 ○ 霊魂の依り代——招き寄せられた霊魂が乗り移るもの。

設問

(一) 「生きている日本人は、生きているというだけで、霊に対して弱い立場に置かれていたのである」(傍線部ア)とあるが、どういうことか説明せよ。

(二) 「慰霊団の現地での慰霊行動は、私には十分に理解できるものである」(傍線部イ)とあるが、なぜ「十分に理解できる」のか、説明せよ。

(三) 「戦争によってこの年老いた元日本海軍の兵士たちの人生の時間の、ある部分が止まってしまった」(傍線部ウ)とあるが、どういうことか説明せよ。

(四) 「その国家がその国家のために命を捧げた兵士を祀るという疑似宗教的行事」(傍線部工)とあるが、なぜ「疑似宗教的行事」とされるのか、説明せよ。

(五) 「その骨を依り代にして帰国する靈を迎えたいという「思い」は、国家だけではなく、民衆のなかにもあつたとみるべきであろう」(傍線部才)とあるが、なぜそのように言えるのか、一〇〇字以上一二〇字以内で述べよ。(句読点も一字として数える。なお、採点に際しては、表記についても考慮する。)

(六) 傍線部 a・b・c・d・e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a ミレン b テイハク c タクセン d ツイラク e ヒサイ

第二 問

次の文章は、北国の山寺に一人籠もつて修行する法師が、雪に閉じこめられ、飢えに苦しんで観音菩薩に救いを求めている場
から始まっている。これを読んで、後の設問に答えよ。

「なか助け給はざらん。高き位を求め、重き宝を求めばこそあらめ、ただ今日食べて、命生くばかりの物を求めて賜べ」と申す
ほどに、乾の隅の荒れたるに、狼に追はれたる鹿入り来て、倒れて死ぬ。ここにこの法師、「観音の賜びたるなんめり」と、「食ひ
やせまし」と思へども、「年ごろ仏を頼みて行ふこと、やうやう年積もりにたり。いかでかこれにはかに食はん。聞けば、生き物
みな前の世の父母なり。われ物欲しいひながら、親の肉を屠りて食らはん。物の肉を食ふ人は、仏の種を絶ちて、地獄に入る道
なり。よろづの鳥獸も、見ては逃げ走り、怖ぢ騒ぐ。菩薩も遠ざかり給ふべし」と思へども、この世の人の悲しきことは、後の
罪もおぼえず、ただ今生きたるほどの堪へがたさに堪へかねて、刀を抜きて、左右の股の肉を切り取りて、鍋に入れて煮食ひつ。
その味はひの甘きこと限りなし。

さて、物の欲しさも失せぬ。力も付きて人心地おぼゆ。「あさましきわざをもしつるかな」と思ひて、泣く泣くるたるほどに、
人々あまた来る音す。聞けば、「この寺に籠もりたりし聖はいかになり給ひにけん。人通ひたる跡もなし。参り物もあらじ。人気
なきは、もし死に給ひにけるか」と、口々に言ふ音す。「この肉を食ひたる跡をいかでひき隠さん」など思へど、すべき方なし。「ま
だ食ひ残して鍋にあるも見苦し」など思ふほどに、人々入り来ぬ。

「いかにしてか日ごろおはしつる」など、廻りを見れば、鍋に檜の切れを入れて煮食ひたり。「これは、食ひ物なしといひなが
ら、木をいかなる人か食ふ」と言ひて、いみじくあはれがるに、人々仏を見奉れば、左右の股を新しく彫り取りたり。「これは、こ
の聖の食ひたるなり」とて、「いとあさましきわざし給へる聖かな。同じ木を切り食ふものならば、柱をも割り食ひてんものを。な

ど仏を損きなひ給ひけん」と言ふ。驚きて、この聖見奉れば、人々言ふがごとし。「さは、ありつる鹿は仏の験し給へるにこそありけれ」と思ひて、ありつるやうを人々に語れば、あはれがり悲しみあひたりけるほどに、法師、泣く泣く仏の御前に参りて申す。「もし仏のし給へることならば、もとの様にならせ給ひね」と返す返す申しければ、人々見る前に、もとの様になり満ちにけり。

〔古本説話集〕

〔注〕 ○仏の種を絶ちて——成仏する可能性を絶つて。

○仏——ここでは観音菩薩像のこと。

設問

- (一) 傍線部ア・ウを現代語訳せよ。
- (二) 傍線部イおよびエの「あさましきわざ」は、それぞれどのような内容を指すか、簡潔に記せ。
- (三) 傍線部オについて、具体的な内容がわかるように現代語訳せよ。

第三 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

秦襄王病。百姓為之禱。病愈。殺牛塞禱。郎中閻遏、公孫衍出見之。曰、「非社臘之時也、奚自殺牛而祠社。」怪而問之。百姓曰、「人主病、為之禱。今病愈、殺牛塞禱。」閻遏、公孫衍說見王、拜賀曰、「過堯舜矣。」王驚曰、「何謂也。」對曰、「堯舜其民未至、為之禱也。今王病、而民以牛禱、病愈、殺牛塞禱。故臣窃以王為過堯舜也。」王因使人問之。「何里為之。」訾其里正与伍老、屯二甲。閻遏、公孫衍媿不敢言。王曰、「子何故不知於此。」彼民

之所_ヨ以_レ為_ス我_ガ用_ヲ者_ハ、非_ズ以_テ吾_ノ愛_ス之_ヲ為_ス我_ガ用_ヲ者_也。以_テ吾_ノ勢_{アル}之_ヲ為_ス我_ガ用_ヲ者_也。故_ニ遂_ニ絶_ツ愛_ノ道_也。」

(『韓非子』外儲說右下による)

〔注〕 ○塞禱——神の靈驗に感謝する祭祀。○郎中——侍從官。○閻遏、公孫衍——ともに人名。○社——土地神。○臘——陰曆十二月に行う祭祀。○訾——罰として金品を取り立てる。○里正——里長。○伍老——五人組の頭。○甲——よろい。○勢——権勢。

設問

- (一) 「過_ニ堯_ノ舜_ニ矣」_トあるが、
- (ア) この文の主語に当たる人名を記せ。
- (イ) 話者はなぜそのように考えたのか。簡潔に説明せよ。
- (二) 「王因使_ニ人_ノ問_フ之_ヲ。何_レ里_ヲ為_レ之_ニ」を、「為_レ之_ノ」の内容を明らかにして、平易な現代語に訳せ。
- (三) 「絶_ニ愛_ノ道_也」_トあるが、
- (ア) 王がそうしたのはなぜか。簡潔に説明せよ。
- (イ) 王は具体的には何をしたのか。簡潔に説明せよ。